

世田谷まちづくりファンド 30 周年に向けた取り組み —24 時間オンラインイベントを終えて

小山 弘美¹⁾

KOYAMA, Hiromi

(世田谷まちづくりファンド運営委員)

1. 世田谷まちづくりファンドとは

1992 年 12 月 1 日に設立された公益信託世田谷まちづくりファンドは、2022 年に 30 周年を迎える。これまで助成してきた団体数は 430 団体となっており、多くの多様な区民の活動に助成を行ってきた。公益信託とは個人や法人が財産を社会に還元すべく信託し、信託銀行がその財産を管理・運営していく仕組みである。世田谷まちづくりファンドの委託者は、当時の財団法人世田谷区都市整備公社（現一般財団法人世田谷トラストまちづくり）であり、担当部署は「世田谷まちづくりセンター」であった。行政だけでなく、市民、企業からも寄付を募り、中立な立場から助成を行うことが目指されていた。

ファンドの信託目的は「住民主体のまちづくり活動を行うもの又はそれを援助するものに対して助成を行うことにより、住民の創意と工夫にあふれたまちづくりが推進され、もって住民が望む、だれもが安心して暮らせる人間性豊かで魅力的なまちの創造に寄与すること」とされている。公益信託の仕組みでは、こうした目的に従って、受託者である信託銀行が助成を行っていくのであるが、この助成先について提言するのが、ファンド運営委員会である。しかし、こうしたシンプルな仕組み通りに助成を行っていないことが世田谷まちづくりファンドの特徴といえる。その 1 つは、助成先を決定するプロセスに「公開審査会」が位置づけられていることである。一般の人にも公開で助成申請団体のプレゼンが行われ、審査員からの質問や審査結果も公開されながら進んでいく。こうした取り組みを取り入れたのは世田谷まちづくりファンドが最初であるとされる。

またもう 1 つの特徴は、世田谷まちづくりファンドは、ファンドの助成を受けた団体同士の交流が目指されていることである。ファンドが設定された当初から、中間報告会や最終報告会が開催されてきた。現在でも世田谷トラストまちづくり主催の交流会には、ファンド助成を受けた団体が必ず出席するように応募の手引きに記載されている。公益信託の仕組み自体にはこのような制度がないため、こうした交流の場は、世田谷トラストまちづくり（かつては「まちづくりセンター」）や、市民の有志が支援して行われてきた。

2. 世田谷まちづくりファンド運営委員会の特徴

一方で、ファンド運営委員も受託者である信託銀行が招集する正規の運営委員会や、公開審査会および交流会のほかにも、ファンド自体をどうしていくか、あるいは助成部門をどうするかといった独自の話し合いの場を持ちながら、制度的な役割以上にコミットしてきた

歴史を持っている。現在のファンド運営委員は10名おり、2年任期でおおむね2期務めて交代していく。1回の交代で約半数の委員が入れ替わりながら継続されてきた。学識経験者、ファンドの卒業生を含むまちづくり活動の経験者、まちづくりコンサルタントや中間支援組織の関係者などの市民と、行政からは都市整備政策部部長が入っている。

2020年度は、まちづくりファンドの助成を通常通り行うことができなかった。例年であれば6月の公開審査会で助成団体および助成金額を決定するが、第1回目の緊急事態宣言が明けたばかりの2020年6月には開催することができなかった。9月にオンラインによる審査会が行われたが、ファンドが設定されてから初めて審査会の一般公開が行われなかった。また活動団体も、新型コロナウイルス感染症がいつ落ち着くかもわからない中で、暗中模索の状態であった。

こうした状況に対応するために、ファンド運営委員会では、コロナ禍に対応した新しい助成部門の検討を行っていた。コロナ禍でどのように各団体が活動し、どのようなことに困っているか、どのような支援や助成が求められているかを知るために、ファンド運営委員主催のオンラインによるシンポジウムを11月に2回開催した。その結果、新部門である「つながりラボ」部門が創設された。また、コロナ禍で通常の資金集めができず、活動継続が困難になっているファンド卒業団体が想定されることから、通常は助成対象期間が3年間となっている「まちづくり活動部門」において、コロナ禍での時限的対応として4回目の助成を可能にした。このように、歴代のファンド運営委員会はその時々課題に合わせてファンドの助成部門を工夫してきたのである。

3. 「まちづくりデイ」イベントの企画

新型コロナウイルス感染症が大きく猛威を振るっていた2021年4月に、新しい運営委員4名が加わり新体制となった。2021年度は、予定通り6月に審査会をオンラインで開催し、まちづくり活動部門の4年目の申請が加わったこともあり、かなり活況であった。一方で、まちづくりファンドは20周年を迎えたところから追加信託は行われておらず、大きな転換点にあった。そのころから20年先の世田谷のまちづくりを考えた取り組みがなされてきた。「世田谷で、”キラっ”と光るまちづくりのグループを生み出すこと」、そしてこのキラ星を応援する「コミュニティをつくること」が目指されていた「キラ星応援コミュニティ部門」の設定はその典型であると考えられる。

コロナ禍前の2019年にも、ファンドの終わりも見据えた助成部門の検討（新しいことにチャレンジして終わるか、そのまま粛々と続けていくのか）を行っていた。しかし、コロナ禍によって状況が一変し、この議論をいったんおいて、コロナ禍に対応した助成部門の検討を2020年度には行っていたという事情があった。コロナ禍でのオンライン審査など運営体制が落ち着いたところで、ファンドの最後に向けた取り組みについて、運営委員のなかで話し合う必要があった。それと同時に、2022年のファンド30周年の取り組みについても話題

にあがっていた。

こうした経緯から、今後の3年間のファンドの部門編成とファンド30周年の取り組みが一緒に検討された。ファンド30周年に対しては、「30年間の振り返りが大事」「アーカイブができるとうい」といった意見が出た。一方で、コロナ禍がどのようになるのかわからない中で、「実際に集まれるのか」といった懸念も示された。新しい委員から「30周年のお披露目感が大事、過去の人たちも再び巻き込めるようなもの。それが新しい仕組みにつながるのでは」という意見が出た。そして、「全員話すイベント」の案が採用されたのである。また、ファンドが設立された12月1日を「世田谷まちづくりデイ」のようにして、ファンドに関わった人たちが一斉に活動する日にしてはどうかという意見が出たのである。これによって、2022年の12月に「まちづくりデイ」のイベントをまちづくりファンド30周年の記念として行うことが決定した。また、このイベントに向けて2021年12月に、プレイベントを行うことになった。これが今回の「24時間作戦会議みたいなまちづくりイベント」である。

4. 「まちづくりデイ」プレイベントの概要

「24時間作戦会議みたいなまちづくりイベント」は世田谷トラストまちづくりと世田谷まちづくりファンド運営委員会の共催で、12月3日（金）19時から4日（土）19時まで行われた。このイベントはまちづくりファンド30周年を記念し、2022年12月1日を最初の「まちづくりデイ」にするための、世田谷のまちづくりらしく「みんなで考える」イベントである。事前に申し込んでおけばzoomで出席して議論に参加することができ、そうでない人もふらっと好きな時間帯にYouTubeでライブ配信を視聴することができる形式をとった。実際の参加者は、zoomに入室したのは端末ベースで85件、YouTube視聴数は997回であった。

プログラムは、世田谷のまちづくりやまちづくりファンドに関わりのある（あるいは関心のある）人や団体を中心に15分間で次々に話をしてもらうのが、基本的な形式である。正式にエントリーされた話者だけでも、のべ55名にのぼる。他にも、実際のまちづくりの活動場所と中継をつないで、活動グループが話をしたり、その場にいる人にインタビューがなされたりするパートや、個別のプログラムが組まれたパートの組み合わせとなっている。活動団体の現地からの中継として、きぬたまあそび村、羽根木プレーパーク、100人の本屋さんなどからリポートされた。また、世田谷区都市整備政策部の各部署の職員によって、今取り組んでいるまちづくりの現場から報告がなされた。主なプログラムは、表1に示した通りである。なおこの24時間イベントは、2022年の「まちづくりデイ」をどうするか考えるイベントなので、すべての登壇者に、話の最後に「まちづくりデイ」への期待やアイデアを聞いていった。

表1 「24時間作戦会議みたいなまちづくりイベント」主なプログラム

3日	19:00~21:00	現運営委員のオンライン公開会議「来年『新部門』どうしようかの会」
4日	0:00~3:00	「0時スタート！世田谷ユース・ミッドナイトと〜く！」
	3:00~6:00	丑三つ時企画「世田谷のまちづくりはどこから来てどこへ行くのか」
	6:00~6:45	中継「芳則の部屋@100人の本屋さん」
	8:00~8:45	企画トーク「玉川田園調布のまちづくり」
	11:15~11:45	中継「多摩川河川敷の大きな黒板を『まちづくりのアイデア』で埋めよう！ 〜きぬたまあそび村」
	14:00~14:30	中継「羽根木プレーパークのリーダーハウスプロジェクトについて」
	17:00~19:00	「まちづくりデイ作戦会議〜『まちづくりデイ』をどうしようかの会」

5. イベント実施の様子

ここでは、各プログラムに司会として参加したり、現地で活動報告を行ったりした運営委員による、プログラム実施の様子や感想を紹介したい²⁾。

(1) 「来年『新部門』 どうしようかの会」

現運営委員のオンライン公開会議「来年『新部門』 どうしようかの会」では、現在のファンドの運営委員が集まり、まちづくりデイの狙い、ファンドの今後についてのアイデア出しや議論を行った。運営委員も一枚岩であるわけではなく、それぞれのまちづくりデイに対する考え方が違う。議論の中でその違いが表出したことで、聴衆にもまちづくりデイが試行錯誤の途上のものであることが伝わったのではないだろうか。そこで運営委員から出されたまちづくりデイのアイデアは「まちづくり現場からの中継をたくさんしたい」「地元を取り組みをしたい」といった交流を志向するもの、「これからの新しい世代につなげたい」「中学生や小学生が語る、参加する仕組み」といった次世代への継承を志向するもの、「地域行政への政策提言をつくってプレゼンイベント」「地域の事業所（企業）を招く」といった行政や企業との協働を志向するもの、「事業承継講座」「市民活動へのミニお試し会」といった具体的なニーズの解決を志向するものなどがあつた。これらのアイデアは、以後の22時間のまちづくりデイのなかで、繰り返し出てくる論点であつたように思う。

(2) 「0時スタート！世田谷ユース・ミッドナイトと〜く！」

初日の21時からの15分トークは、過去に行った世田谷まちづくりファンドの「評価」について、方法や結果を振り返り、まちづくり活動における横のつながりの重要性を確認するところからスタートした。各トークでは、まちづくりファンドや世田谷のまちに関係する多くの団体の活動紹介が行われた。防災や交通安全などの安心安全、演劇的手法による取り組み、子どもや乳幼児の居場所づくりなど多種多様な活動が紹介された。また、いじめ反対のメッセージ募集やサンタクロースに扮するボランティアの募集など、活動への具体的な参

加の呼びかけもあった。

深夜は、個別プログラム「0時スタート！世田谷ユース・ミッドナイトと〜く！」が行われた。まちづくりを担う20代から30代の若者が集まり、まちづくりに関わったきっかけや今の活動についての情報交換などが行われた。かつて烏山にあった中高生の居場所の「運営者」と「利用者」が7年の時を経て再会するという、まちづくりの歴史と承継を感じさせる一幕もあった。

プログラムの後半のテーマトークでは、「最近、若者のまちづくりの参画が少ないのはなぜか」という問いかけがされた。遊びの場がソーシャルゲームに移り、児童館などで育まれる多世代とのつながりが薄くなってきているなど、「子どもの集い方の変化」が影響しているという意見のほか、ジュニアリーダー研修の変化にも原因があるという指摘もあった。また、若者世代を取り巻く厳しい外部環境についても意見が交わされた。様々な影響で生活が困窮し、社会とのつながりが薄くなってしまっている若者ほど、気軽にまちづくり活動に触れあえる環境づくりが重要であるという意見には多くの共感と賛同が集まった。

自由に語り合えるコミュニティ、多世代とのつながりによる自分と「まち」との距離の変化、参加したくなる活動の仕組みと適度で緩やかなネットワークについては、若者だけでなく全世代に共通している課題である。まちづくり活動への支援のあり方について示唆に富んだ時間だった。

(3)「世田谷のまちづくりはどこから来てどこへ行くのか」

「これ本当に夜中にやる企画？」と思ってしまうほど本格的な世田谷まちづくりトーク番組を深夜3時から6時まで行った。運営委員としては湧口善之さんと私（池本修悟）が担当し、企画段階でまちづくりファンドの運営にもかかわっていた千葉晋也さん、市川徹さん、そして「100人の本屋さん」店主の吉澤卓さんに Facebook メッセージで相談し3人とも間髪入れずOKしていただき企画会議を実施した。番組構成は「まちづくり」「商店街」「風景づくり」の3パートに分け、各パートの冒頭に話題提供者がイントロトークを行いそのあとはフリートークと決定した。

3時台は市川さんがイントロトークをし、長年コラボしてきた千葉さんと近年の世田谷のまちづくりについて総ざらい。60～90年代のまちづくり史の続きとなる2000年代以降について語られた。4時台は「100人の本屋さん」店主の吉澤さんがなぜ起業したのかを含めたイントロトークを行い、ゲストの用賀商店街の杉本浩一さんがカフェ下ノ谷、ゆるキャラ、用賀商店街など豊富な経験に基づきクリティカルなトークを展開していただき眠気が一気に覚めた。5時台は千葉さんに風景づくりの現状をイントロトークしていただき、公共の街路樹の利活用など世田谷内外で先駆的な実践を続ける湧口さんの現場目線での問題提起など見応えのある一時間だった。年齢を考えると少々無理をしたがやった甲斐がある記憶に残る企画となった。

活動報告



写真1 丑三つ時企画の様子 場所：100人の本屋さん
(撮影者 上：吉澤卓さん、下：千葉晋也さん)

(4)多摩川河川敷の砦・多摩川あそび村（きぬたまあそび村）からの中継

地域の親たちが 1999 年に立ち上げ、まちづくりファンド「はじめの一步」助成を受け、同じ年の「世田谷ふれあい巡視」で「多摩川水系河川整備計画」にこの場所の遊び場活用が盛り込まれた。施設は「まちを元気にする拠点づくり部門」助成を受け、タイル職人のきぬたまのパパ協力の井戸をはじめ、子どもたちがデザインしみんなで手作りした。2019 年の台風で壊れたが、ツリーハウスは奥多摩のヒノキ間伐体験で子どもたちと切った丸太の樹皮を剥いて再建した。今日は子育てメッセのイベントのため、クズのツルでクリスマスリース作りを行なっている。大きな手作り黒板に、まちづくりのアイデアを今日の終わりまでに書いてもらう予定だったが、その後書いたり消したりを繰り返し、大人の思惑どおりにいかない自由な子どもたちだった。

(5)「現場から『三茶のミライ』を考える！」

世田谷区都市整備政策部は、「現場から『三茶のミライ』を考える！」と題して、キャロットタワー近くのふれあい広場から、三軒茶屋駅周辺のまちづくりの基本計画となる「三茶のミライ」の取り組み状況等を報告した。

報告の中で、「三茶のミライ」の策定に向け、まちづくり会議でのワークショップやシンポジウムでの、区民や事業者、町会、商店街、大学等、三軒茶屋に関わりを持つ多くの方々の参加による熱心な議論の状況や、みんなで思い描いた9つの未来像等を紹介

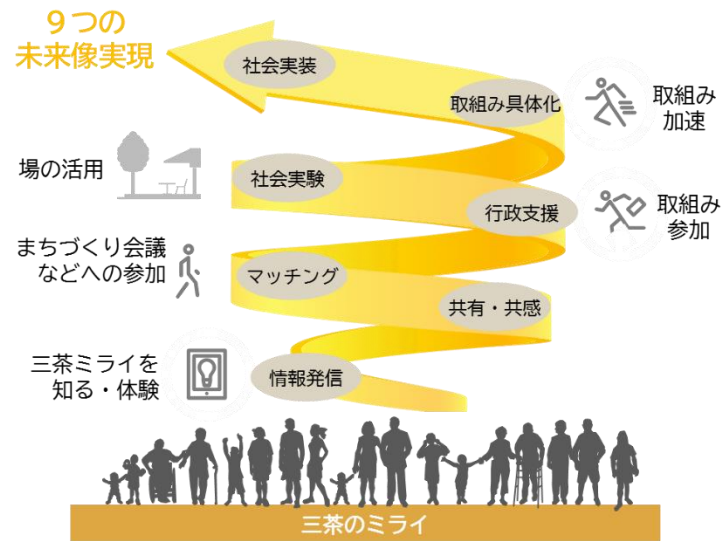


図1 みんなで取り組む9つの未来像実現のイメージ

し、一人ひとりがまちづくりの担い手となる区民主体のまちづくりへの思いを新たにしました。

まちづくりデイをはじめとした、様々な機会を生かしながら、まちづくりの取組みを広く発信するとともに、引き続き、地域の方々とまちづくり会議の開催やPRコーナーの設置、まちのルールについても議論を交わし、歩行者の滞留空間創出の社会実験等新たな試みも加え、「三茶のミライ」で描くまちの未来像の実現に向けて、まちづくりの関心や機運を醸成し、賑いと活気に満ちた魅力あるまちづくりを推進していきます！

(6) 「まちづくりデイ作戦会議～『まちづくりデイ』をどうしようかの会」

オンラインイベントの最後は、これまでの22時間で集めた「まちづくりデイ」のアイデアをもとに、ファンド運営委員会を中心に実際来年のまちづくりデイの方向性を考えた。集まったアイデアは全部で75あり、運営委員で投票を行い、21のアイデアがピックアップされ、ひとつひとつに投票した思いを語り合った。中でも、「まちづくり現場からの中継をたくさん」「スタンプラリー」「事業承継講座」「運営側に100人集める」というアイデアに票が多く入った。これらのリストをもとに、今後「まちづくりデイ」を一緒に進めていくメンバーを募って、2022年の本番に向けて動いていく準備が整った。その他にも、若者や現在まちづくり活動に参加していないあるいはできない層に、どのようにアプローチできるか、まちづくりファンドの大きな目的は何かなど、かなり熱い議論が交わされた。

6. プレイメントを終えて

今回の24時間プレイメントを終えて共有された課題は、大きく3つに集約できる。一つ

活動報告

には連携・協働がカギとなる。24 時間オンラインでまちづくりについて語るという無茶な企画に対して、たった1か月程の準備期間にもかかわらず多くの登壇者が集まり、その場の議論も盛り上がりながら進んでいける。世田谷まちづくりファンドや多くのまちづくり団体がつくり上げてきたコミュニティがこうして存在していることは誰もが実感したことだろう。その一方で、世田谷区行政や企業、他自治体における活動等との協働・連携は課題となっているということである。二つには、世田谷まちづくりファンドが紡ぎあげてきた30年の間に、多くの活動団体が歴史を積み重ね、各団体の活動の承継が問題となっていることである。この点は、それ自体がどんな問題であるかを共有する機会が必要との認識を持つことができた。三つには、これまで活動には関わっていない人たちにどのように参加してもらうことができるかということである。強い言葉でいえば、今回のこうした取り組みが「内輪」になってしまっているのではないかという問題提起である。若者、学生、あるいはこうした活動に参加する時間的・金銭的に余裕のない層の人々などに、どうアプローチすることができるかという問題である。

これらの問題が、24 時間イベントを通して随所で共有されたのであるが、その問題をどう捉えているか、どのような解決策を想定しているかは、ファンド運営委員の中でも様々である。イベントの最初と最後の公開運営委員会では、かなり白熱した意見交換がなされたが、それはいつものことである。一枚岩ではない運営委員が、ああでもないこうでもない議論した結果、世田谷まちづくりファンドが運営されているということが「公開」されたことは一つよかった点ではないかと思う。

さて、このイベントは、2022 年 12 月開催予定の世田谷まちづくりファンド 30 周年イベント「まちづくりデイ」を企画することが目的であった。「まちづくりデイ」に対する多くのアイデアと世田谷のまちづくりについて課題共有できたことを活かして、ファンド運営委員だけでなく、「まちづくりデイ」実行委員会を立ち上げて企画を進めていく予定である。多様な意見の人々との議論、そして関わる人がそれを楽しみながら実現していく「まちづくりデイ」に期待したい。

[注]

¹⁾ 関東学院大学社会学部准教授

²⁾ 本節の(1)～(5)は、下記のファンド運営委員の皆さんにご執筆いただき、筆者が体裁等若干の修正を加えたものである。(1)饗庭伸さん、(2)橘たかさん、(3)池本修悟さん、(4)上原幸子さん、(5)畝目晴彦さん。